

第二十二回受賞作品 秋 亜綺羅『透明海岸から鳥の島まで』



受賞のことば

秋 亜綺羅

畏敬する丸山豊先生のお名まえの賞をいただくことになりました。わたしは六十二歳になっただけでも、ことばの海をうまく泳ぐことができず、溺れそうになりながら、もがき続けています。そんなわたしにこのような名誉が、突然舞い降りてきました。藁をもつかみたい溺れる者に、重い、重い名誉がのしかかってきたのであります。

丸山豊先生の詩に「詩人」というタイトルの短い散文詩があります。「詩人は 画家 僧侶 駅長 キャベツ 幼児 水夫ではない。寺院のような揺りかごのような住所をもたない。詩人はほとんど言葉を持たない。そしてたぶん 画家 僧侶 駅長 キャベツ 幼児 水夫である。走ってゆく光をおそれるようにただひとつの言葉をおそれ その言葉によって生き その言葉のために一歩前へすすむ。」(詩集『水上歩』)というものです。たとえば今回受賞したわたしの詩集の中の「猫うつしのキッス」などは、明らかにこの詩の影響を受けています。なぜ「キャベツ」なのか。「水夫ではない」がどうして「水夫である」と等しいのか。この一見ナンセンスに見える逆説の方法を乗り越えようと試みるわけけれども、壁にぶつかってしまうのです。それは「丸山豊」という名の巨大な壁なのだろうと思います。

新しくないものは古くもなれないというけれど、丸山豊先生の詩は残念ながらまだ新鮮で、現代詩にとってまだ誰も乗り越えていない壁なのだと考えます。

選考してくださった清水哲男先生、高橋順子先生に深謝いたします。そしてなによりも！「現代詩」という、「生活」というよりどちらかといえば「学術的」と思われがちな芸術分野に對して、このように全国的な壮大な視野を持たれる久留米市民のみなさんに、激烈な敬意を表したいと思います。

選考理由について

最近の日本の詩を読んでいて不満なのは、技巧的には巧みな作品が多いけれど、読後の後味があまりよろしくない点だ。風通しが悪いというのか、なんとなくどこかで澱んでいるような詩が多いのだ。昔はこんなではなかったような気がする。たとえテーマは重くても、読後に爽快感があった。透明な風が心を吹きすぎていき、心身ともにリフレッシュされるような喜びがあった。選考に当たっては、風通しのよい、ああ読んでよかつたと思われるような詩集を採り上げたつもりである。

丸山豊記念現代詩賞選考委員 清水 哲男

高橋 順子

詩集『透明海岸から鳥の島まで』について

冒頭の二篇の詩に頻出する「ドリーム・オン」という呼びかけが、秋亜綺羅の作品を解くキー・ワードになりそうだ。私の理解では、この言葉の意味は「そんなふうに見るのは勝手だが、そんなことはありえないからね」ということになる。つまり、どんな場合にも人の夢想は限りないけれど、それらは多く現実から目を逸らすための方便みたいに働くのさ、という

ことだ。そしてこの「ドリーム・オン」は読者に向けられている言葉であると同時に、作者自身にも向けられている。読者よりも前に、まずは自身に向けられていると読むほうがよいのかもしれない。

この詩集の面白さは、全編どの作品にも隠し味のように、常に「ドリーム・オン」が反響しているところだ。そのことによつて、安易な抒情に流されまいとする作者の意思が、しかし確かな抒情性をもつて立ち現れるというところに、秋亜綺羅の詩法の魅力がある。

たとえば集中の白眉とも言うべき「津波」では、死んだ恋人を悼んで「わたしのこころは恋人の吐息のなかにある」と抒情する一方で、「会いたいという名の孤独／会えないという名の約束」と切り返す。大震災以降、多くの詩が書かれてきたなかで、秋亜綺羅のように、過剰な抒情に溺れることなく、対象を深く愛し、しかも現実への視点を忘れずに書いている詩人は少ないと思う。

このことは作者の天性の資質によるところも大きいだろうが、十代の作品をまとめた第一詩集以降の長い沈黙の間に獲得された人生観、社会観の結実によるものと、私には思われる。

沈黙は、決して無駄ではなかった。

(選考委員を代表して 清水 哲男)

## 第二十三回受賞作品 鈴木志郎康『ペチャブル詩人』



受賞のことば

鈴木 志郎康

丸山豊記念現代詩賞をわたしの詩集『ペチャブル詩人』が受賞したことを大変光栄に思います。ありがとうございます。個に徹して行くという考え方で書かれた詩集が広く社会的に活躍された丸山豊という詩人を記念する賞を受けて、わたしの考え方が社会的に評価されたものと受け止め大変嬉しく思うところです。まあ、「やったあ」という思いですね。

詩集『ペチャブル詩人』に収録した詩は、2006年に多摩美術大学を定年退職した後、脊柱管狭窄症と左右の人口股関節置換の手術をして、思うように外出できなくなって家に引きこもることが多くなり、ある意味で自分に向き合う生活環境で書かれたものです。「蒟蒻のペチャブル」という詩があります。家内と夕飯の支度をしていたわたしの手元からコンニャクが滑って台所のリノリウムの上に落ちたのですね。そのコンニャクの「瞬間のごくごく小さい衝撃と振動」をわたしは自分の老朽化した筋肉の表現として「ペチャブル」と捉えたのです。つまりわたしは「ペチャブル詩人」なんだと自覚したわけです。老朽化した自分の姿をどんな風に見せていくか、というところで幾つかの工夫をしてみましたつもりです。あまり沢山の人の詩

を読んでいるわけではありませんが、送られてくる詩集や雑誌に掲載されている詩を読んで、近頃はどうもよく掴めなくなってきたので、そのことをちよつと考えてみると、書かれている詩が言葉だけを追いかけていて、その詩を書いている人の姿が見えなくなっているように思えたのです。今のところ詩は言葉を書くものなんですね。そこに落とし穴があるというように思うんです。詩は書かれた言葉に生まれてくるのではなくて、言葉の頭の中に思い浮かべるといふところにあるのであつて、書かれた詩は実は詩の抜け殻だと思ふのです。言葉を頭の中に思い浮かべたとき、ドキドキして身体が燃えるような気持ちになる、それが詩ではないか、と思ふのです。詩を創る者としてその気持ちを共有したいなと思ふのです。そのためには、ちよつと、飛躍した言い方をすると、言葉を身体に返してやることだ、と言ふと思ひます。生まれた時からずつと付き合つてきたそれぞれ異なる身体に言葉を返す、といふことで、詩を創作する者の姿が見えてくるのでないか、とまあ勝手に考へて実践したのが『ペチャブル詩人』といふわけですね。

この詩集は、若い自分が電車内の向かいの席に座つていて若い女性に成り代わろうと空想する作品から始まります。そして青首大根に意地悪く笑われたり五月の若葉には優しく笑われたりすることを想像するのですが、これは生き物としての自分の身体を掴まえる道筋なんですね。そして、亡くなつた詩を書いていた友人たちに思いを馳せ、更に事故や震災でなくなつた見知らぬ人たちを思い、言葉にならない言葉である叫びに行き着くのです。凄まじい現実を受け止めた時の身体が発する言葉、それが叫びですね。何事もない静かな誰もいない居間でわざと「キヤー」と叫んでみる。この嘘のキヤーで身体がぞくつとす。言葉を身体に返すといふことのちよつと心を冷やす手荒い

やり方でした。この叫びを飲み込むといふことで、東日本大震災の当日のテレビ中継を見た時の自分の存在を言葉にすることができたのでした。

身体の奥の方にあつて他人に言いたくないことを言おうとするとつい吃つてしまひますね。その吃音という身体に引つ掛かつた言葉の出し方によつて詩人としての意識をぶちまけることで自分の姿を露わにしようとした作品が「わたしは詩人です」と『現代詩手帖現代詩年鑑2013』を手にして」なんです。自分自身の経歴や感情やらのもろもろを詩で語るなんて今までに考へたこともありませんでした。詩は思いや感情を語つたりまたは現実を起こつた事や虚構の世界を語つたりするものだと思つていたからです。詩で自分自身をまるごと語るなんて破廉恥なことと思つていたのです。ところが、ここに来て、この年齢のこの生活で、ある意味で世間が遠退くのを感じて、抽象的な存在である詩の作者、つまり詩人である自分を投げ飛ばすように詩によつて語つてしまひたくなつたのです。語りたくない気持ちをね除けようとするところで吃音になつたわけですね。まあ、書いてしまつてもやはり自分を掴み損ねているのが分かりました。つまり詩の書き手が無傷のまま残つていふのです。言葉を使うつて本當に厄介ですね。

詩集『ペチャブル詩人』は、素晴らしい比喩や綺麗なイメージを追い求める詩集と比べれば「ねじれた詩集」なんですね。審査された方々はその「ねじれ」を評価して下つたと思ひ感謝します。今後わたしは自分がねじれ詩を書き続ける確信はありませんが、当分はねじれ詩を書き続けたいと思つていますし、今のところその道しか見えていないのです。

#### 選考経過・理由

約三百冊の詩集の中から、二名の選考委員が前もつてそれぞ

れ三冊ずつを選びだし、二月二十八日の選考会にのぞんだ。修辭の巧みさや完成度にはそれほど重点を置かなかった。結局どの詩の世界が選考委員の胸の深いところまで降りてきたか、ということであつたらう。

鈴木志郎康詩集『ペチャブル詩人』の存在感は圧倒的だった。氏は長い詩歴をもち、独得の詩風ですでに定評のある詩人だが、この詩集において、氏にとっての新しい地平に立ちつつ、豊かな成果をもたらされたことに、敬意を表する次第です

丸山豊記念現代詩賞選考委員 清水 哲男  
高橋 順子

詩集『ペチャブル詩人』について

「ペチャブル」というおかしな形容語句は、詩人の造語である。コンニャクが手からすべって床に落ちたとき、「ペチャ」という衝撃音と「ブル」という振動音の組み合わせだったものという。人を支えている矜持を骨抜きにする言葉で、老年に達してそういう境地に立たれたわけである。

集中の「『現代詩手帖現代詩年鑑2013』を手にして」は、しかし剽軽に書かれてはいるが、詩人その人のプライドに関わることである。このこだわりようは「ペチャブル」ではすまないらしい。プライドにからむ詩人の心の闇を見せられるわけだが、それも詩の厚みと考えるべきか。

脚を悪くされた詩人の活動範囲は狭まり、TVや新聞の情報を介しての詩が書かれ、それらはいきおい精彩を欠くといわざるをえないが、旺盛な好奇心がそれを上回っている。たとえば一人の部屋で「キヤー」と叫んでみるところなど普通の人にはできない。それを腰を据えて考察する真物の天晴れな詩人がここにいる。

全体に凄味は感じさせないが、ため息をつきつつも、明るくて、面白くて、寂しい、新しい老境の詩である。  
(高橋 順子 記)

## 第二十四回受賞作品 若尾儀武

『ながれもせんで、在るだけの川』



受賞のことば

若尾 儀武

丸山豊というお名前を初めて知ったのは50歳を過ぎてからのことです。当時私は藤沢市内のある「荒れた」中学校に赴任していました。授業が成り立たない、ものが壊される、暴力事件が絶えないといった状況のなかで、恒例の全校合唱コンクールが開かれ、三年生のあるクラスが「組曲筑後川」を歌いました。最終章の「河口」だったと思います。いい歌は誰の心にも沁みるものなのです。場内から私語が消えて熱唱するステージの生徒に目と耳と心が集中するのがまるで物理的な現象のようにはつきりと感じられました。涙が止まりませんでした。私の心を揺さぶっていたのは歌詞であり曲であり歌う生徒であり受けとめる生徒でした。その学年の生徒は、卒業式の門出の歌として「河口」を歌って卒業していきました。

そのような体験をさせてくださった丸山豊氏の業績を顕彰す

る丸山豊記念現代詩賞に詩集「流れもせんで、在るだけの川」が選ばれたというのは、幸運な隕石が落ちてきたとしか言いようのないことです。大変光栄なことと思います。弾けるような喜びを感じます。ありがとうございます。

詩集「流れもせんで、在るだけの川」は、朝鮮半島から様々な事情で日本に移り住んだ人々やその人々の子どもと私の交わりが核になっています。もう半世紀以上も前のことです。そんな昔のことをよく覚えていたなという人がいます。また、そんなにも長い間モチベーションを保ち続けられたなと感心される方もいらつしやいます。確かに記憶は時とともに霞んでいくというのが自然でしょう。しかし、彼らとの交わりは齡を重ねる毎に私の裡でますます鮮明になってくるのです。「なぜ」と問われると、その問いが鋭角的すぎてしどろもどろになります。しかし、そうなることを恐れずに言うと、彼らとの交わりが楽しかったとか彼らに抱いていたものが眩しかったというだけではなく、分かっているつもりでいた彼らのことが実のところ「何も見えていなかった」「何も分かっていなかった」という思い、そして、その見えないもの、分からないものの正体を明らかにしないで済ませ、彼らがある時点まで来ると、とてつもない大きな口を開けた在るのか無いのかすら分からないようなところによく消えてしまう、そんなときに感じる喪失感と寂しさそして得体のしれない感情が一気に火柱を上げて、彼らとの交わりの隅々まで照らす、そんな按配とも言えはいいのでしょうか。それが何かの拍子に今でも燃えさかるのです。

集中、「『帰る』とも／『帰らない』ともいわずに／あなたは帰る」（「序詩」という詩句があります。帰るとも、帰らな

いともいわずに帰るところとは、一体どんなところなのでしょうか。私には分かりません。それでも、「あなた」は帰ってゆくのです。おそらく、「あなた」にも分からないところでしょう。また、集中、「赤いね／赤いね／もう行きどまりだから／余計に赤いね」（「もう行きどまりだから」という詩句があります。これは、「キムさん」と「ぼく」の会話の中に出てくる一節です。「キムさん」が言葉に窮して目にとめたセンリョウの実の赤。赤は赤に極まって、もう梃子でも動きません。先には何もありません。それでも「キムさん」は行くのです。

もうひとつ、集中から。「ハヤシ／おまえ／桃色の豚／大きゅうなったら／もう／そんなところ／出ていけ／ゆれるハヤシ／桃色の豚」。「ぼくは「ハヤシ」くん、もうそんなところ出て行くと叫んでいます。しかし、叫んでいる「ぼく」に当てがあるわけではありません。「ハヤシ」くんにしてみれば尚更でしょう。それが分かっているながら叫ぶのですから、「ぼく」も崩れざるをえない。しかし、「ハヤシ」くんはそれを上回って崩れています。おおよそ、人が人について全部分かるなどということはありません。です。私に彼らについて「分からない」などと言うのはおこがましいことです。しかし、私の周りにいた彼ら以外の多くの人は「帰る」と言って、帰るところに帰って行きました。それに引き比べ、彼らにはその手触り感が感じられないのです。手を伸ばしたものの、何も掴めない。その手の寂しさのようなものが、詩集「流れもせんで、在るだけの川」の世界です。しかし、言葉にしたとたん、言葉にする前に私の内部を吹いていたものがするりとこぼれ落ちているように思えてなりません。

ここ何年か、ヘイトスピーチにみられる風潮や政治状況に強い憤りを感じています。しかし、詩集『流れもせんで、在るだけの川』は、直接的にそれらを告発していません。この詩集で、もしそんなことをすれば彼らを裏切ることになると考えたからです。

私が通い始めた詩の実作講座で、講師の稲川方人氏は「愚直に書きなさい。」とアドバイスをくださいました。意外な言葉でした。しかし、その言葉は胸に響きました。詩集『流れもせんで、在るだけの川』は、「愚直」の姿勢で書き綴ったものです。

目に止めてくださった選者の先生方に深く感謝いたします。と、同時に、現代詩に営々と光を当て続けておられる久留米市の皆さまに敬意を表したいと思います。

#### 選考経過・理由

十二年間選考委員を務めてきた清水哲男、高橋順子両氏にかわり、今回からこの役を担うことになった。年間何百冊と出版される詩集の中から互いに三冊を選び、それを一冊に絞り込むという難しさをまさに痛感する選考だった。

若尾儀武詩集『流れもせんで、在るだけの川』は、作者が過ごした異郷の人たちとの少年期を、柔らかく、また烙印のようにも手繰り、歴史をも透視させている。書かずにはおれなかつたという自発の重みも、手応えある「この一冊」になったといえよう。最後の最後まで好敵手だったのが中森美方詩集『幻の犬』。敬意をもってここに記しておく。

選考委員 野沢 啓、木坂 涼

講評 詩集『流れもせんで、在るだけの川』について

「わたしの周りには多くの異郷のひとがいた。わたしは一九四六年に奈良県大和郡山市の農村部に生まれた。そして、十八歳までそこで過ごした。村の大人たちは、「あの人らとあんまり遊ばんほうがええ」と言った。」（作者「あとがき」より）

詩集『流れもせんで、在るだけの川』を読み始めたとき、物語を読むような感覚に見舞われた。上質な短編小説の、ある一部分に接するような感じもあつた。

六十代の作者が自身の少年期を眺めれば、そこはもう物語に近いのかもしれない。けれどここにある物語は過去に終わるものではなかつた。二十九の詩篇は一貫して「異郷のひと」を探り辿る。差別、疎外、畏怖。当時の少年はそういう語を知らず、また大人になった作者も告発や懺悔として回想しているのではない。消えることのない感覚や会話などを通して、終わりを持たない内在する体験を描いていく。事実を盛り込みながらの牙えた改行のカッティング、「行間に託す」という詩の魅力も十分に発揮されている。いい一冊に出会えた。

選考委員 木坂 涼 記

第二十五回受賞作品 白井明大

『生きようと生きるほうへ』



受賞のことば

白井 明大

沖繩で暮らすようになって、五年が経ちました。この島は母の故郷で、ぼくが幼少期から何度も訪れてきたふるさとです。いつかは沖繩に住んでみたいねと、妻と時折話していましたが、でもまさか移り住むきっかけが突然降って湧くとは思いませんでした。ぼくたち家族はそれまで暮らしていた東京を離れ、原発事故から逃れて、沖繩へ移り住むことになりました。それまでぼくは、日々のできごとを題材として詩を書いてきました。ですが、この島に来て二年ほどの間は、目の前でできごとを詩に書くことができませんでした。震災後、幾度か東北を訪れて目の当たりにした現実が心を占め、それに拮抗できるだけの自分の言葉を見つけるのが困難でした。

瓦屋根が崩れても直せないままブルーシートがかかった家、一日数十分までと決めた上でないと子らが遊べない公園、急な雨のなかズブ濡れで自転車通学する学生たち。いままで当たり前には享受していた日常を失ってしまった土地になお人も暮らしていることに直面し、たとえば「窓を開ける」という一言す

ら、住む場所や状況などによって全く異なる意味を持つのだと思ひ知らされたとき、どんな詩を書いていいのかわからなくなりました。

そうしたなかで、ぼくに詩を書くことを取り戻させてくれたのは、南国の道ばたに咲く花の姿であり、新しい環境に向き合い、飛び込んでいく子の姿であり、そして東北を旅して出会った、当地で生きる人の姿でした。命がひたむきに生きるさまが自分のなかに少し少し積み重なって、誰もが懸命に生きていることを心底感じ、だったら自分もまた懸命に生きようと思えるようになりました。それを、詩を書く足場にできました。

今回の賞をいただいたのは、とてもうれしいことですが、ぼくにはなく、この詩集に授けられた賞なのだと思ひ受けとめていきます。

島にはアメリカ軍の基地があり、島人を苦しめる現実があります。ぼくの従妹が通う大学にアメリカ軍のヘリが墜落した事故は、まだ記憶に新しいものです。また一方で、生命力あふれる自然と、突き抜けるように青くまぶしい空、どこまでも澄んで広がる海、ゆるやかに流れる時間、暑い暑い熱風……、とそうした鮮烈な島の光景に毎日囲まれていると、自分までもがたくましくなり、生気が高まってくるようです。島の命と基地とはつねに対峙し、いまの沖繩の明暗を浮き彫りにします。島に住んで初めて、身をもって沖繩が抱える辛い状況を知りました。ですが目の前の現実を受けとめようとしても、自分の立っている場所は、そうそう確かなものではありません。

例えば「被災地じゃないのになぜ東京から逃げたのか」と問われたことがあります。被災者ではないのに自主的に逃げた者。そう名指されました。そのとき、このような問いに直面しているのは自分だけではないのだろうと想像しました。沖繩には東

京から避難してきた人が多くいますし、福岡にも少なくないと聞きます。この問いに含まれる批判的な響きや、その問いに追いやられる側の逃げ場のなさは、今回の詩集で書きたかったもの

です。また、自分の通う大学に軍のヘリが落ちた体験を持つ従妹が「わたしたちが何をどんなに言っても、何も変わらない」とつぶやくのを聞いたことがあります。ですが、生まれたときから基地がある島で暮らしてきた従妹の気持ちを、ずっと東京で暮らしてきたぼくが、わかるとはたやすく言えません。

ひとたび多数派からはずれてしまったとき、なぜお前は人と違うのか、なぜもつと困っている人がいるのに自分だけ助かるうとするのか、なぜお前さえ我慢すれば皆が助かるのに和を乱して異を唱えるのかなどと、少数派にまわってしまった人はさまたまな同調圧力におしつぶされそうになります。本来なら、お互いに震災や原発事故に弱っているはずなのに、あるいは、ともに平和を祈り願っているはずなのに、人と人とが分断され、互いに手を取り合えなくなる状況が生み出されています。それは悲しいことです。では、詩人にできることは何でしょう。

詩は、人の心につながっている言葉だと思っています。書き手の心から発して生まれ、読者に読まれたとき、その人の心に響きうる言葉です。皆と違う一人の道を歩んだとしても、誰もが尊い自由な存在である、とぼくは告げたいと願っています。この詩集はそう言いたくて、それを伝えたくて、できたものかもしれません。

手渡したい言葉があります。

どこかにいる、誰かに、この詩集が出会えるきっかけを与えてくださり、どうもありがとうございます。丸山豊記念現代詩賞の受賞に心から感謝いたします。

#### 選考経過・理由

一昨年から選考委員の役を仰せつかり、二度目とはいえ、ことしが最後の選考となった。数百冊に及ぶ新刊詩集のなかからそれぞれ三冊ずつ候補詩集を挙げ、読み直すなかで最終決定をするのはことしも難産だった。

受賞した白井明大詩集『生きようと生きるほうへ』は福島原発事故という事態にたいして沖繩に移住するという決断を真摯に自己に問いかけるまことに誠実な姿勢と、それにもまさる優れた抒情性の発露において評価されるべきである。最後まで判断に迷った八重洋一郎『太陽帆走』は全篇ポエジーに溢れている哲学的な優れた詩的達成であった。

選考委員 野沢 啓、木坂 涼

#### 講評 詩集『生きようと生きるほうへ』

「放射能は、暮らしを奪う。正義の戦争なんて、ない。貧しい人が貧しいままで、弱って困っている人が弱って困っているままでいて平気な世の中は狂っている」と詩人は詩集の「後記」で書いている。東日本大震災とそれにつづく福島第一原発事故という非常事態に直面して母の故郷がある沖繩に避難することを家族で即座に決め、その結果として移住することになったことを、なぜ「逃亡」したのかと責めるひとがいるという。こういう場合、日本社会の共同体意識は個人にたいして暗黙の強制力を及ぼしてくることが多い。避難の決断をするにあたって子どもが小さいということや原発事故の被災をことのほか懼れる理由があつたのだろう。その決断についてとやかく言われたことを詩人は苦にするが、へんきたかつたから／いのちが何より



大事だと思ふから」と「生きる」という詩のなかではつきりと  
応えている。

震災と原発事故のあと、いままでのように詩を書くことはと  
てもむずかしくなったなかで、この詩集が切り開こうとした、  
切実さもつらさもそのままに書いていこうとする姿勢は、その  
迷いもふくめて強く肯定されるべきであろう。

選考委員 野沢 啓 記